

木曽川

木曽川文庫は治水の資料館。
水の大切さや恐ろしさを歴史から学び、
これからの治水を皆様とともに
考えていきたいと思っています。
今回は揖斐川沿いの輪中地帯から
丘陵に広がる多度町の歴史と現状、
そして進行中の治水事業をご紹介します。



INDEX

ふるさとの街・探訪記《多度町》

◆歴史と文化が香る山紫水明の郷

面白WATCHING

◆自然と歴史が息づく町並みを
遊・優WALKING

歴史ドキュメント

◆宝暦治水と西田喜兵衛の功績

TALK&TALK

◆嘉永山除川論争と石柱

民話の小箱

◆葦原で命を救われた願證寺の幼子

多度町全景



歴史と文化が香る

山紫水明の郷

多度町は三重県の北端に位置する山紫水明の郷。東には揖斐・長良・木曾の三大河川を眺望する多度山のふもと、落葉川のほとりに鎮座する多度神社、風光明媚な八壺溪谷、四季折々の自然美に恵まれ多くの参拝客や観光客が集います。昭和30年には、多度、野代、古浜、七取、古美の5町村が合併。歴史と自然と産業の調和をめざして、意欲的な活動を展開しています。

多度名産八壺豆と紅梅焼

多度詣りのみやげものとして親しまれている八壺豆は、名勝八壺峽（多度峽）の名を冠したもの。今から240年ほど昔、八壺峽みそぎ滝前の茶店の老婆が片手間に創り始めたと伝えられています。その形はみそぎ滝に輝く銀色の水滴を形どったもの。ほんのりとした甘さが、郷愁を誘います。紅梅焼きは安政年間に創始されたもので多度八景の一つである野々宮の梅林を形どっています。これらは、初詣や多度祭りなど季節的に売られていましたが、次第に定着し、八壺豆と並んで名菓と称されるようになりました。

明治改修と揖斐川工事

分流前の木曾三川沿川は水害の常襲地帯。明治二十年、近代的な治水事業として木曾三川の分流が計画され、多度町の揖斐川筋でも大規模な浚渫と新堤防の築造が行われました。

七取でも総延長4 kmに及ぶ築堤工事が行なわれましたが、浚渫土砂の他に旧堤防の土砂も利用せざるを得なかったため、秋冬（非出水期）の間に施工せねばならず大変な難工事となりました。また南之郷では一箇所、七取では四箇所の水制工を建設。この明治改修によって洪水渦が防がれただけではなく、耕地の改良を伴い豊かな実りを多度町にもたらしました。

その半面、新河道の開削や河川敷の拡張により、多くの人家や田地が失われました。

このため、東平賀、古敷、福永、上之郷、南之郷の集落では移転を余儀なくされ、この人々の中には、北海道に新天地を求めた者も多く、屯田兵として活躍したと伝えられています。



揖斐川風景

神話の時代から現代へ 信仰とともに歩んだ歴史

多度町の歴史は、縄文時代早期。最も古い遺跡からは当時の狩猟や漁猟生活をしていただことが窺われます。

往古の地形は、平坦部は海浜、河床の低い揖斐川が海に流れ込んでいる所には洲が点在。農耕生活が始まると、洲を拓いて田畑とし、鎌倉・室町の時代には盛んに新田を開発。穀倉地帯として成長するとともに輪中が形成されていきました。

また揖斐川沿いの香取地区は、水上交通の要所として発達。上流と下流を結ぶ中継地点として多くの物資が入りし、港町として繁栄したと伝えられています。

一方多度神社を中心とした門前町としても繁栄し、「伊勢に詣らば多度をもかけ。お多度詣らにや片詣り」と俗謡にも謳われるほどに。しかし戦国時代には織田信長による焼き打ちに遭い、一時的に衰退しましたが、慶長5年桑名城主本多忠勝公により再興。今日の基礎が築かれました。

昭和30年には現在の「多度町」が誕生。



木曾三川架橋、道路網などの整備が進む一方、豊かな水源を利用した本格的半導体工場も進出。大きな変革を遂げようとしています。

貴重な遺産が焼失した伊勢暴動

明治政府は富国強兵策の一環として、地租改正を実施しました。しかしこれは想像以上に過酷なもの。嘆願書などを出して、各地で減税運動が活発化しました。

明治9年12月、飯野郡魚見村（現松阪市）でも区長への嘆願が夜半過ぎまで続き、それがついに暴動へと進展。後に「伊勢暴動」と呼ばれる農民一揆が勃発したのでした。

この動きは1〜2日の間に三重県北部地方にも波及、暴徒は竹槍、とび口などを手に、放火や打ちこわしを扇動。暴動は多度町にも及び、官庁や学校をはじめ元庄屋なども被害を蒙り、公用の文書のみならず大切な家財や家宝も焼失。軍隊の出動により、12月23日に鎮圧され多度町だけで100名以上の逮捕者を出しました。

その後、地租は減額されましたが、宝暦治水の文献を所蔵する西田喜兵衛宅も焼失。貴重な歴史遺産が失われてしまいました。

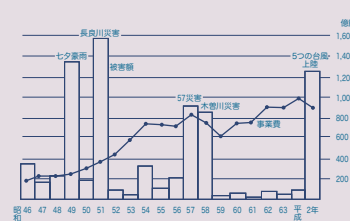


明治改修による新河道開削概図

これからの治水事業

治水事業の五ヶ年計画と肱江川改修工事の推進

●水害はなくなっていない。 事業費と被害額の推移（中部地建管内）



- 日本では、国土の約10%にすぎない河川の氾濫区域に全人口の約50%、全資産の約75%が集中し、洪水の被害を受けやすい条件にあります。
- 治水事業5ヶ年計画は、昭和35年度より実施され、第8次治水事業5ヶ年計画（平成4〜8年度）では総投資規模17兆5千億円で事業の推進を図ることとしています。

▼多度・肱江の両川は多度町のほぼ全域を流域とする揖斐川の支川。

この下流部は揖斐川の洪水時に水位の影響を受け、多度川では昭和三十四年に2回も破堤するなど水に悩まされてきました。

昭和四十八年に多度・肱江川とも揖斐川合流点から国道二五八号まで建設省直轄管理区間に編入、多度川では同四十九年度から堤防改修工事が行われてきました。

肱江川については、第八次治水事業五ヶ年計画の主要事業の一つとして、堤防改修工事が行われています。



多度町を彩る季節の祭り

■ 上げ馬神事(多度神社)

—5月4・5日—

若者の士気を鼓舞し、豊作を占うために始まったと伝えられています。祭りは若武者姿の6人の騎士が130mの馬場を走り高さ3mの土壁に挑戦。荒行事で農作物の豊凶などが占われます。



■ 虫送り祭り【イモチ】(大鳥居、下野代)

豊作を祈り害虫を駆除するため、毎年夏に開催されます。大幣を先頭に、高張提灯、太鼓、大鐘などの行列が農道を練り歩き、子供たちの「イモチ、イモチ、田の虫出ていけ」の声が夏空に響きわたります。



■ 流鏝馬神事(多度神社)

流鏝馬は千年以上の歴史があります。昨年度より多度町の秋祭りとして新たに行われています。古式豊かな装束をまとった騎士が馬を走らせ、三か所の的に次々と矢を射抜きます。

コラム「だからNO.1」

KISSO をご愛読の皆様へ。編集部から耳寄りなお知らせです。KISSO では、あなたのナンバーワンをお待ちしております。絵画、作文、俳句、工作など、川にまつわる作品ならなんでも結構です。どんどんご応募下さい。応募作品は厳正なる審査の上選考し、当選作品は KISSO 誌面に発表。と同時に、木曽川文庫にも展示させていただきます。皆様の作品を、お待ちしております。

● 応募先 ●

船頭平閘門管理所
木曽川文庫“KISSO編集部”
〒496愛知県海部郡立田村福原
☎(0567)24-6233



多度神社

2 宇賀神社

延喜式内社で、明治43年、境内、周辺集落の神々を合祀し奉り、現在の宇賀神社となりました。農業、山と火の安全、船便、医薬の神として崇められています。

歴史ゾーン

1 多度神社

ルーツは雄略天皇(紀元5世紀)の時代。この頃ご社殿が創建されたようです。本宮の多度神社は産業発展の神。また別宮の一目連神社は金属工業の神で、北勢地方の鋳物業界から崇められています。宝物殿には平安時代の古鏡三十面、神宮寺伽藍縁起並資材帳、金銅五銖鈴(国の重要文化財指定)などが収蔵展示され、全国からの参拝客でにぎわっています。

2 多度の味覚狩り

いちご(4月上旬〜6月)、イモ掘り(9月中旬〜11月上旬)、みかん(10月上旬〜11月中旬)、柿(10月中旬〜11月中旬)など、フルーティな旬の香りを楽しむことができます。

3 多度峡・みそぎ滝

春は新緑、夏は川をせきとめた天然のプールでの水遊びやキャンプ、秋は紅葉と、四季の彩りが美しい渓谷です。また多度大社のみそぎ場となっているみそぎ滝は、高さ25m。日ざしを浴びて輝く飛沫は、まさに絶景です。



イモ掘り



みかん狩り



多度峡天然プール



宇賀神社



常音寺



多度山上公園



町立郷土資料館

多度山からの夜景

辿るは多度へ 自然と歴史が息づく町並みを 遊・優WALKING

滔々^{とうとう}と流れる揖斐の調べを聞きながら、川辺をゆったり歩いていけば、忘れかけた風景が微笑みかけてくれます。夕日を浴びて輝く多度の山、ノスタルジックな町並み。まるでタイムトリップしたかのように、不思議な感動と出会う町。さあ、自然と文化と歴史が息づく町に、出かけてみませんか？

3 常音寺

室町時代、時宗の末寺として開基されましたが、第二次世界大戦後、浄土真宗大谷派に改宗されました。また薩摩義士松崎仲右衛門他4名の菩提寺でもあり、宝暦治水工事全犠牲者の大きな位牌が祀られています。

4 町立郷土資料館

この建物は、多度尋常高等小学校(昭和8年建築)の一部を移築し保存したものです。館内には図書館や民俗資料展示室などがあり、田船、水車、桑扱台などが展示されています。

レジャーゾーン

1 多度山上公園

山頂からは濃尾平野をゆったり流れる木曽三川、白く光る伊勢湾、雲の上に浮かぶアルプ

嘉永山除川論争と石柱

多度町史編纂委員長 伊東春夫

山除川上流



山除川下流

多度町大字柚井字一番割の北隣りは、岐阜県海津郡南濃町大字太田新田です。この地点では文字通りの一衣帯水、山除川の南が県境となっています。

この両側は、ほとんど高低差のない水田であって、川の兩岸の高さは、柚井側は水田面から約1m、これに比べ太田側はそれより14m程高くなっています。

この辺りでは「尾張藩の堤防は三尺高かるべし」という言葉を聴きますが、太田輪中には、その尾張藩支藩の高須藩領があり、また柚井は桑名藩領であって、この両者の間に堤防の高上について紛争が起きました。



まず、弘化4年（1847）11月桑名藩へ、輪中側から柚井の新規築堤工事を却下するように申し入れ、翌月には輪中内の天領・私領から同趣旨のものが桑名藩へ提出され、4年弱の争論となりました。

この対立点は、前記の輪中側から見ると新規築堤工事、柚井の恒例の堤防嵩上工事に過ぎず、また柚井の水田地帯を洪水時の水開き場（湛水地）としか見ないのに対し、柚井にとっては重要な水田を守る築堤工事でした。

しかし翌々嘉永2年4月、両者は済口（和解）証文を笠松郡代へ出しましたが、4月には柚井が、6月には輪中側が、各、破棄申請を提出、争論は再開しました。その後、同4年9月、和議が成立、定杭を打つと書かれています。尚、年号がないので推測になりますが、この6月頃から、郡代に対して、桑名藩が件の堤普請を藩費で賄ったことを知らせたり郡代周辺からも、調停がましい動きが見られました。

以下は筆者の推測ですが、今、柚井側の低い堤に頭を覗かせている石柱が、嘉永4年の定杭か、それを踏襲したものではないかと考えています。

参考文献 岐阜県歴史資料館所蔵

「旧笠松郡代所蔵文書」

※定杭↓堤防の高さを定めた杭

伊東 春夫

大正11年3月24日生

国学院大学高等師範部卒業

昭和22年より昭和58年まで教職

多度町史編纂委員長

多度町文化財調査会長

桑名市文化財保護委員

三重県埋蔵文化財調査員

共同執筆 桑名市史 続編

勢濃排水樋門の今・昔

揖斐川周辺の輪中地帯では、分流地点の締め切りに造った堤防に樋門を設置し、一昼夜に1〜2回、たまった水を自然に排水させていました。しかし流出土砂によつては河床は高まり、樋門の効果は悪くなるばかり。年に何回となく冠水し「柚井に豊年なし」とまでいわれるほどに。昭和31年の建設省直轄工事によつて勢濃樋門が完成し、初めて排水機場も設置されました。

が、以後30年の間に進んだ地盤沈下の影響と老朽化で、施設は著しく痛んでしまいました。

そこで3年半の歳月をかけ大改修し、平成2年には新しい排水樋門が完成。周辺には勢濃樋門公園も出来、ランドスケープとなっています。

※柚井↓多度町北東部の集落



勢濃排水樋門

薩摩義士によつて成し遂げられた
宝暦治水と西田喜兵衛の功績

刀を鋏にかえ、治水事業に立ち向かった薩摩義士。濁流は渦を巻き、工事は苦難に苦難を重ねた。宝暦5年5月、ついに宝暦治水は完了したが、総奉行平田鞠負は多額の費用と犠牲者をだした責任をとり自刃。その偉業は、西田喜兵衛芝寿によつて後世に伝えられ、今もなお、賞賛の言葉は絶えることがありません。

影の功労者・西田喜兵衛

宝暦4年2月、治水史上稀にみる難事業であつた宝暦治水は、薩摩藩の御手伝普請により始められました。揖斐川下流沿岸の多度町（平賀、古敷、東西福永、上之郷、南之郷などの集落）は四之手に属し、藩士は工区の庄屋の家を宿に、現場に通いました。

当時藩士に宿所を提供した庄屋の多くが幕府方。複雑にからむ利害により薩摩藩士たちには非協力的でしたが、三代西田喜兵衛は、この趨勢に背を向けて工事場に出役。平田鞠負の良き相談相手として、助言をしたと伝えられています。また工事途中自刃して散った藩士たちの言動や自刃の原因の顛末を丹念に

偉業を顕彰した西田喜兵衛芝寿

明治9年12月に勃発した伊勢暴動により、西田家も焼失し家宝の諸書類のほとんどを失いました。

十代西里喜兵衛芝寿はこの不測の事態を謝罪し償うため、また祖先の意志を後世に伝えるため、宝暦治水誌の編纂や記念碑建設など五項目に渡る顕彰を決意し身を粉にして奔走しました。

書留め、朝夕多度神社に参拝して藩士たちの加護を祈願することが、日課の一つでした。

宝暦5年5月工事が完了すると平田鞠負は、すべての責任をとり自刃。西田喜兵衛は「薩州藩の恩を忘れるべからず」と御手伝普請の諸書類を家宝として秘藏しました。

宝暦治水のあらまし

宝暦3年12月25日、幕府は薩摩藩に御手伝普請を命じ、同4年2月27日、平田鞠負を総奉行に工事は着手された。工事区間は、木曾、長良、揖斐三大河川にまたがる広範囲な地域に及び、延長約112kmを対象とするもの。一之手、二之手、三之手、四之手の工区に分けて実施された。中でも難工事となつたのが、三之手の大樽川洗堰及び四之手の油島の締切工事。しかし同5年5月22日に工事は完了。多くの犠牲と多額の費用を費やした責任を取り、平田鞠負は自刃。その偉業は現在にも語り継がれている。

千本松原の治水記念碑



草原で命を救われた願證寺の幼子

三重県多度町

昔、昔、今から四百年ほど前のお話です。

夕暮れ時に、香取川の河原近くを二隻の田船に乗った村人がおりました。黄金色の稲穂を垂れる田園で農作業を終えた村人は、多度山に沈む夕日の美しさに見とれておりました。

そんな時、遠くからかすかな泣き声が聞こえてきました。不思議に思った村人があたりを見渡すと、中州の草原に高貴な身なりをした中年の女性と、少年の亡き骸が流されているではありませんか。驚いた村人がそばに近づくと、女性の手にはしっかりと紐がにぎりしめられ、その紐は長く伸びて、

草原の浅瀬に漂う白い包みにつながっていました。かすかな泣き声は、この白い包みから聞こえてきたのでした。

上等のふとんと草の束にくるまった幼子。とにかく助けなくてはと村人は包みを解いて抱き上げると、幼子の着ていた紺の衣には、長島の願證寺の御堂の紋がしるされていました。

その日は、長島城落城の日。時の権力者織田信長と苦しい戦いを続けた一向宗が無念の敗北をとげたその日なのでした。門徒を率いた願證寺の寺主・顯忍は自死。村人の手によって救われた幼子は、顯忍の弟君である准

恵であつたのです。

「これはえらい事じゃ。早くお隠しやねば」と、二人の亡き骸をねんころに葬ってから、御子を抱きかかえてそこを立ち去り、稲右衛門（多度町正覚寺・初代賢智）の寺にかくまって、手厚く介抱したのでした。

数日後、稲右衛門は大阪石山本願寺へ進退をお連れしたところ、顯忍上人はことのはがお喜びになり、御養女として阿弥陀如来の絵像をつかわされました。

その阿弥陀如来の絵像は今でも正覚寺の家宝として保存されているそうです。

●木曾川文庫利用案内●



《開館時間》 午前9時～午後4時30分
 《休館日》 毎週月曜日・祝祭日・年末年始
 《入館料》 無料
 《交通機関》 国道1号線尾張大橋から車で約10分
 名神羽島I.Cから車で約30分
 東名阪長島I.Cから車で約10分

《お問い合わせ》
 船頭平閘門管理所・
 木曾川文庫
 〒496 愛知県海部郡
 立田村福原
 TEL(0567)24-6233



＝編＝集＝後＝記＝

KISSO もお陰様で2年目を迎え、新年号を発刊することとなりました。編集にあたっては、多度町建設課・教育委員会の皆様並びに十四代西田喜兵衛にあたる西田喜大さんにお世話になり、ありがとうございました。

次号は岐阜市です。ご期待ください。

お詫び：Vol.4の1頁に記載された「三重県の西端」は「三重県の北東端」に訂正させていただきます。

（表紙写真 左：多度峡みそぎ滝
 右上：油島大橋より揖斐川上流をのぞむ。
 左下：多度町みかん農園）

●お知らせ…平成5年3月1日～20日まで木曾川文庫改装の為休館します。

『KISSO』Vol.5 平成5年1月発行

発行：建設省中部地方建設局木曾川下流工事事務所 〒511三重県桑名市播磨81

制作：財団法人河川環境管理財団 〒450愛知県名古屋市中村区名駅四丁目3番10号(東海ビル)

TEL(0594)24-5715

TEL(052)565-1976